

## 「脱成長」の応用哲学

神戸大学先端融合研究環 松田 毅

近年、日本でもようやく「脱成長」の思想と実践が話題になり、議論され始めています。この主題を考え、討議することは、今後の日本社会の針路を構想するうえで不可欠であり、応用哲学を先端融合研究として捉えるならば、喫緊の重要課題のひとつであると言えます。わたしたちのグループが2016年秋から行っている「メタ科学技術研究プロジェクト:方法・倫理・政策の総合的研究について」の焦点のひとつが「環境」ですが、『人新世の「資本論」』2020の齋藤幸平氏と脱成長論の中野佳裕氏とのワークショップだけでなく、文学部と経済学部との「次世代エネルギーの選択」を話し合う合同授業の経験も提題の背景を形作っています。環境倫理学では、環境と経済の関係をどう捉えるかはいわば「永遠の課題」であると言っても過言ではないからです。

日本でも世界でも、気候危機と再生可能エネルギーの急速な導入そしてパリ協定の枠組みのもと、近未来の経済社会のモデル選択の問題が浮上しています。提題では「脱成長」と「グリーン・ニューディール」の論争に着目しますが、その前に Bioeconomics の Bonaiuti. *The Great Transition*. 2014 を手引きに、「脱成長」の経済システム論ないし「複雑系の科学的基礎を確認し、考察と構想の前提となる「限界利潤の低減 declining marginal returns」DMR 仮説とその諸帰結の認識を共有できるようにします。この仮説は、リカードの「収穫逡減の法則」を一般化し、資本投入と利潤の動的関係について有限な資源量・環境容量、技術革新など経済成長の諸制約を浮き彫りにするものです。経済成長により生じる様々な構造変化のなかで、DMR 仮説から帰結するのは、社会を構成する諸構造の複雑性が増加する過程で、或る変数が閾値に達すると、どの複雑性を増加させても諸利益が減少する「低減の時代」（「現実の脱成長」）に入り、複雑な社会が崩壊するリスクが生じることです。

DMR 仮説が描く事態は、過去の大規模な社会変動を説明するとともに、現代資本主義の動態と21世紀の「移行」のシナリオを与える基礎になります。これを踏まえ、比較政治学の Fiorino の *A Good Life on a finite Earth, the political economy of Green Growth*. 2018 の4つの経済社会のモデル: 権威主義、Brown Growth、Green Growth、脱成長を手引きに、Green Growth からの脱成長モデル批判を紹介したうえで、論点整理をします。(1)Green growth は DMR に逆らう「資本主義」の延命策か。(2)脱成長は単一の路線かです。提題者の主張は、Green Growth も脱成長も、大きく見れば、「生産力至上主義」や「技術楽観主義」からの脱却を目指し、気候危機を乗り越えるために、複数のトラックで併走することが可能ではないかというものです。

上記の主張を論証するために、明日香壽川『グリーン・ニューディール——世界を動かすガバナング・アジェンダ』2021 と齋藤の上掲書に含まれる、相互批判を取り上げ、議論の材料を提供するとともに、「脱成長」のテーマが含む応用哲学のさらなる諸課題を確認することができればと思います。

## 未来像の研究と脱成長

早稲田大学地域・地域間研究機構 中野佳裕

21世紀初頭のフランスに出現した脱成長 (la décroissance) は、持続可能な世界を構築するための文明移行プロジェクトとして、今日世界中で注目されています。この言葉は当初、国連主導の持続可能な開発政策 (sustainable development) の曖昧さと矛盾を批判し、脱開発でエコロジー志向の地域づくりに取り組む草の根の市民的实践をネットワーク化するスローガンとして導入されました。その後、この言葉が公共の議論の的になるにしたがい、理論研究も進められるようになり、2008年以降は2年に一度のペースで国際会議も開催されるに至っています。

脱成長運動の台頭から20年が経過した現在、同運動の学術的言説を取り囲む状況は複雑化しています。この講義ではまず、近年の人新世言説の普及と共に欧米諸国で議論されている未来像を巡る主要な政策的・学術的言説 (3つの経済成長主義 (business as usual=BAU)、崩壊学) を取り上げ、それらの問題点を整理します。その上で、脱成長理論が構想する未来像について明らかにしていきます。

脱成長の学術的言説は、主に文化理論の潮流とエコロジー経済学の潮流の二つで構成されていますが、この講義では特に脱成長運動の提唱者セルジュ・ラトゥーシュの著作に注目し、文化理論としての脱成長について理解を深めていきます。

ラトゥーシュは近著『脱成長』(白水社クセジュ、2020)で、消費社会のグローバル化の駆動力として西洋近代啓蒙主義の時代に誕生した「際限のない進歩」の観念を批判しています。そして西洋近代の「限度のなさ」に対して、脱成長を「限度の感覚 (le sens des limites)」を回復するプロジェクトとして位置づけています。その方法としてラトゥーシュは、西洋近代の言説空間の中で周縁化・排除されてきた〈南〉の思想の再発見・再評価を試みます。グローバル思想史のこの認識論的転換の試みは、世界の多様な文化が育む〈場所〉の感覚を再生し、消費社会のグローバル化とは異なる生活が可能であること、そして市場による世界の更なる人工化でもなく、宿命論的な文明崩壊シナリオでもない、オルタナティブな未来の可能性が複数存在することに気づきを与えてくれます。

このようにラトゥーシュは、脱成長を多元的な未来を拓く理論として位置付けています。カタルーニャの宗教哲学者ライモン・パニッカーの「多元世界論」(pluriversalisme)の影響を受けたこの視座は、文化の多様性が生物多様性にとって不可欠であるという海洋学者ジャック＝イヴ・クストーの主張とも通底します。脱成長は、社会進化のメタ・ナラティブの転換を引き起こす理論ですが、それを実現する具体的な実践としては経済の再ローカリゼーションを提案しています。本講義の後半では、脱成長の文化理論が重視する地域主義アプローチについて、イタリアや日本の思潮 (アルベルト・マニャーギ、玉野井芳郎 etc) を参照にしつつ検討していきます。